

日本人に多い性格特徴である 「執着性気質」に見る光と影

志仁会 西協病院 理事長 西脇健三郎

約150年前、日本は近代的な国家を目指した。だが自然災害も多く、近代化に必要な資源が決して豊富にあるとはいえない島国である。そのため、人材の育成が不可欠だった。そこで、そのモデルとして江戸時代後期、農村復興政策の指導者であった二宮金次郎が選ばれ、全国の尋常小学校には、あの金次郎像が校庭に建てられた。みなさんよく御存じだ。

それから50年あまり経った1929年、当時の九州帝国大学下田光造精神科教授が「執着性気質」といった性格特徴を提唱した。その特徴は「気配り、控え目、几帳面、凝り性、責任感が強い、完璧主義的傾向」で、かつ日本人に多い性格特徴と指摘している。何だか明治時代以後の「金次郎」教育で培い、この時期になつて実を結んだのだろう。

だが、その先約15年間戦争の時代が続くことになる。そして、戦に敗れた日本の国は、世界の最貧国になってしまった。しかし、戦後の復興とその後の経済成長は、世界中を驚かせるほど目覚ましいものだった。それを成し遂げた一因には国民の多くが執着性気質であつたからとされている。

そんな日本国民が豊かさを実感してきた75年、神戸大学の中井久夫精神科教授が「再建の倫理としての勤勉と工夫」といった論文を発表した。その一部を紹介しよう。

「…高度成長を支えた者のかなりの部分が執着性気質的職業倫理であるとしても、高度成長の進行とともに、執着性気質者の、より心理的に拘束された者から順に取り残され、さらに高度成長の終末期には倫理そのものが目的喪失によつて空洞化を起してきた。(中略) その後に来るものはあるいは、より陶酔的・自己破壊的・酩酊的・投機的なものではないかという…」

つまり、執着性気質者は、日本の復興と経済成長の担い手であつた。しかし、その目的が達成されると心が空虚となり、結果陶酔的・自己破壊的・酩酊的・投機的な状態に陥る、と中井久夫は指摘している。それは、陶酔的とは薬物依存、自己破壊的は過労死や自殺(うつ病)、酩酊的はアルコール依存、さらに投機的とはギャンブル依存ということになる。となると今日の精神疾患の主流は、これまた執着性気質がもたらしているようだ。

精神科医療では、Global Assessment of Functioning

(通称GAF)という心理的、社会的、職業的機能を考慮した精神健康度の尺度がある。100から0までで評価する。おおむね40以下「仕事や学校、家族関係、判断、思考または気分など多くの面での重大な欠陥がある」が治療の対象とされている。

では、執着性気質の特性である「気配り、控え目、几帳面、凝り性、責任感が強い、完璧主義的傾向」とされる人のGAF評価はどうだろう。まず、81以上の評価に「…社交的にはそつがない」と、これは当然当てはまりそうだ。次に91以上の評価、「…多数の長所があるために他の人々から求められている」と、これも該当する。いずれも高評価だ。それが執着性気質の光のゆえンである。もちろん、さまざまな業界で活躍し、社会をリードし、高い技量を有する人材が多い。

だが反面、その「…社交的にはそつがない」、「…他の人々から求められている」とは、気配り、気遣い、そして結果として、常に気疲れした状態に至るわけだ。つまり執着

性気質の影である。

米国においても、セイラ・アレン・ベントンの著書には、高学歴で、高度な仕事をこなす能力があり、社会的にも地位が高い人たち、いわゆる「仕事ができる奴」がアルコール依存症に陥る高機能アルコール依存症者の実態が記されている。その特徴と特性は「見栄えのする成功に固執する。承認欲求が強い。コミュニケーション能力にたけている。エネルギーで身体的にタフ。競争心が強い。仕事が几帳面。頼まれると断れない傾向が強い。専門的なスキルや学業をこなす能力が高い」といったものである。これに日本人ならでの「協調性、過度の思いやり(気遣い)」と「おもてなし(気配り)」を加えれば、執着性気質の影と同じではないか。最近では、アルコールのみならず、薬物依存、そしてギャンブル、万引き、盗撮といった「行為依存」に陥る人も増えている。よって、今日の執着性気質の社会的評価は光と影との両面といつていい。

日本はこの30年、多くの企業が国際競争力を落としている。そして、コロナ禍。今後、

経済はさらなる低下が懸念される。それに移動・集会・対話の回避・共食の自粛などとの基本的な営みへの委縮。加えてこの先、制度改革。それも制度改革と規制改革が絡み合い加速するとなると社会活動に深刻な影響を与えかねない。執着性気質はこうした変化に弱い。既得権の喪失、新たな制度に馴染めないと自殺、依存症(間接自殺)問題が顕在化するの明白だ。そうした執着性気質の影、すなわち自殺、依存症疾患に対してメディアにもつと関心を、そして行政はそのための対策を実践して欲しい。それが有効に機能すれば、IR推進のためのギャンブル依存症対策は必要ないはずである。

